

【演題名】 コロナ禍における新人教育について ～歯科衛生士の立場から～

【発表者】

大屋 朋子

【所属】

東京歯科大学市川総合病院 歯科・口腔外科

【背景】

2020年に新型コロナウイルス感染症の発生に伴い、医療関係職種等の学校で臨床実習が困難となり、実習時間が大幅に減少した。そのため、臨床経験が少ないまま就職する学生が増えてきた。当院では、新人教育に関する決まったプログラムがなかったため、教育に統一性がなく、うまくいっていない現状があったことから、2020年より新人教育について見直しを開始した。今回は、当院での新人教育プログラム作成の取り組みと、コロナ禍での新人教育で気をつけた点を紹介する。

【方法・結果】

2020年から、新人教育プログラムの準備・作成、新人教育の統一化、理解度や達成度に関するの評価項目を作成し始めた。

以上に加えて、コロナ禍では以下の5つに気をつけて新人教育を行った。

- ①指導者は新人に「実習でできたこと」「実習でできなかったこと」を確認し、指導内容を考える。
- ②入職1～2か月は細かい業務を指導するのではなく、臨床の流れを把握することやその場に慣れてもらうことをメインに、実習でできなかったことを優先的に教える。
- ③直接対面行為(スケーリングなど)の強化
- ④例年よりもスローペースで教育していくこと。
- ⑤適宜、不安点がないか確認をする。

新人教育プログラムを作成したことにより、指導者側の認識の統一が図れた。新人は、やるべきことが明確となり、学びやすい環境ができた。

【考察】

コロナ禍の新人教育では、実習でやっている・わかっている前提で教育するのではなく、指導者と新人が双方の認識を統一させ、例年よりも時間をかけて、教育する必要がある。臨床経験や患者とのコミュニケーションなど、実習でしか経験できないことに関して、優先的に指導することで、新人が抱える不安を緩和させることができると思われる。また、指導者側は、新人が臨床実習時間の減少により、十分な経験ができなかったことで、多くの不安を抱え、就職したことを理解し、指導することが重要である。